

# 源氏物語における「独り言」の引歌

「ひとりごと」と「うち誦ず」と「口ずさむ」

田辺 玲子

伊東祐子氏は源氏物語中の会話文中の引歌表現を詳しく調査されて引歌該当箇所八七五例のうち、会話文中の引歌三二六例を対象として卓論「源氏物語の引歌の種々相」にまとめられた。伊東論文の後注に「本稿にいう会話文とは、相手に対して向けられたものを指す。したがって独り言は会話文とはみなさなかつた」とある（注1）。このように、今までの引歌研究史においては、会話文中の引歌とは、誰かが他の誰かに向かって積極的に語りかけたものについて、主に認定されていた感がある（注2）。又、近年（平成十一年）青柳隆志氏は朗詠史の視点から源氏物語中の漢詩文の朗詠と、古歌の吟誦を比較検討された。そして後者の多くが「口遊び」的なものであり、他者に披瀝することを目的とするケースは殆どみられないと分析された（注3）。青柳説を受けて、伊井春樹氏は「『口ずさぶ』『誦ず』『ひとりごと』『歌ふ』という表現によって引かれる古歌の一節は、必ずしも相手が必要としないで、それによる反応を期待しているわけでもない」と解釈されて会話文中の引歌とは対置する関係にあると述べられた（注4）。

しかし、源氏物語中には独り言の設定の引歌を誰かが聞いていて反応したり、その聞き手によって物語が大きく展開していくという場合が少なからず見られる。となると、独り言ということでは会話文中の引歌から除外してしまうと、見失うものも多いと思われる。本稿では独り言という設定で描かれている引歌について上記の観点から検討してみたい。

なお、独り言を直接さす動詞として勉強社『源氏物語総索引』による

と、「ひとりごと」四十三例・会話文の範疇に入れられない動詞「うち誦ず」三十一例（接頭語「うち」のつかない「誦ず」十例含む）・「口ずさむ」十六例が源氏物語にはある。

本稿では古歌の一部が含まれていれば、全て引歌の範疇に入れるという立場をとっていることを予めお断りしておく。なお、引用した本文は小学館の日本古典文学全集である。括弧内に巻名とページ数を記入した。傍線は筆者によるものである。

## 1 「独り言」の引歌

角川古語大辞典によると、「ひとりごと」は「独り言をいう。聞き手がいないとき、また聞かせるつもりがなくて詩歌を誦し、口に出して歌を詠むことという」となっている。本稿では伊井春樹編の『源氏物語総索引』に認定されている引歌を含む独り言について取り上げる。

まず、簡単に引歌を含む独り言を言った人物とその回数、聞いた相手とその反応について以下に示した。

### ☆引歌を含む「ひとりごと」三十七例

独り言	聞き手（巻名と内容）
源氏13	隨身1（夕顔―返事する）・右近1（夕顔―返事不能）
薫9	紫の上1（玉鬘）・聞き手なし7・独詠2 弁の尼2（宿木の唱和1・東屋―薫の歌を聞き袖を濡らす1）
紫の上2	大君1（椎本―返歌する）・聞き手なし5・独詠1
雲居雁2	源氏2（濡標2―どちらも明石に関して返歌） 夕霧2（少女・夕霧―どちらも返歌するが対照的内容）

夕霧<sup>2</sup> 大宮<sup>1</sup>（少女）・雲居雁<sup>1</sup>（横笛・夕霧の催馬楽を聞く）  
婿の中將<sup>2</sup> 尼君周辺の人々<sup>1</sup>（手習・引歌の真意感違）・地の文<sup>1</sup>  
女三宮乳母<sup>1</sup> 聞き手なし<sup>1</sup>（若菜上・源氏退出を「やみはあやなし」）  
明石の君<sup>1</sup> 聞き手なし<sup>1</sup>（初音・独詠）  
明石尼君<sup>1</sup> 聞き手なし<sup>1</sup>（若菜下・独詠）  
柏木<sup>1</sup> 聞き手なし<sup>1</sup>（若菜下・紫の上重篇を聞き「何か浮世に」）  
浮舟<sup>1</sup> 聞き手なし<sup>1</sup>（手習）  
大輔の命婦<sup>1</sup> 源氏<sup>1</sup>（末摘花・命婦の歌を聞き、末摘花と比較する）  
頭中將<sup>1</sup> 源氏<sup>1</sup>（葵・「雨となり」の歌を聞き、返歌する）  
次にいくつか例をあげてみていきたい。

一、源氏の「独り言」に隨身反応する

（源氏）「Aをちかた人にも申す」と、ひとりごちたまふを、御隨身つ  
いて、「かの白く咲けるをなむ、夕顔と申しはべる。花の名は人めき  
て、かうあやしき垣根になん咲きはべりける」（夕顔一・二二〇）  
Aうち渡すをちかた人にも申すわれそのそに白く咲けるは何の花ぞも

（古今集 雑体 旋頭歌）

源氏と夕顔のドラマチックな恋の始まりの部分である。源氏は五条の  
大式の乳母の見舞いに訪れ、隣家の堀に「這ひかかれる白き花」が目  
にとまった。しかし、古今集のAの歌の下二句「白く咲けるは何の花ぞ  
も」と、直接疑問の箇所を口にせず、二、三句目の「をちかた人にも  
申す」と「ひとりごち」た。隨身は即座に源氏の「独り言」の真意を汲  
み取って花の名と特徴を答えた。伊井春樹氏はこの部分を「さすがに光  
源氏に仕える隨身だけあって、武具を帯びた舍人としての職責に加えて

B命だに心になふ物ならば何かは人を忘れしめん

（古今集 離別 白女）

源氏が帰京後、紫の上に初めて明石の君のことを語る場面である。源  
氏から直接、生まれた姫君のことや、明石の君の人柄、交わした歌など  
聞かされた紫の上は、自分が都で悲しい日々を送っていた時に、源氏は  
他の女と情けを交わしていたのかと裏切られた思いにかられた。そして  
独り言のように嘆いたあと、「おもふどち」の歌が漏れた。先程聞いた  
源氏が明石の君に詠んだ歌を踏まえて、源氏と明石の君の二人を「思ふ  
どち」と表現したところに紫の上の抗議の気持が感じられる。源氏は即  
座に反応して返歌し、「命こそかなひ難かべいものなめれ」と引歌を使  
い、命だけは思うにまかせぬものだが、紫の上を第一とする真情をわか  
って欲しいと訴えた。

②源氏の「独り言」に紫の上「独り言」の引歌で反応

（明石の君からの文を源氏が）うち返し見たまひつつ、「あはれ」と長  
やかに独りごちたまふを、女君、後目に見おこせて（紫の上）「A浦よ  
りをちに漕ぐ舟の」と忍びやかに独りごちながめたまふを、（源氏）  
「まことはかくまでとりなしたまふよ。こはただかばかりのあはれぞや。  
所のさまなどうち思ひやる時々、来し方の忘れがたき独り言を、ようこ  
そ聞きすぐいたまはね」（澤標三一・二八六）

Aみ熊野の浦よりをちに漕ぐ舟の我をばよそに隔てつるかな

（古今六帖 伊勢）

「独りごち」二回、「独り言」一回出てくる場面である。明石の姫君の

和歌のたしなみも充分にそなえていた」と解説されている。伊井氏はさ  
らに「『をちかた人にも申す』という間接的な語句を用いる事によっ  
て、相手と古歌を共有しあって会話を進めるといふ、風流で知的な遊び  
がうかがわれる」とする（注5）。筆者も物語中の引歌の例として恰好  
なものであると感ずる。又、秋山虔氏はこの古今集歌を竹岡正夫の『全  
評釈』の解釈に基づき、「遊女の宿に入りこんで、男が女によびかける  
言葉」と解して、「物語展開の起動力を孕む引歌の機能が『源氏物語』  
には極めて多い」と指摘され、この引歌が「夕顔」巻の今後の展開を暗  
示させるものであるとされた（注6）。

ただ、重要なのはこの場面での源氏の引歌は「独り言」として描写さ  
れている点である。文字通りに解釈して、会話文中の引歌から除外する  
のはどう考えても無理であろう。「独り言」の引歌を会話文の引歌とし  
て検討する必要があることを如実に示す例であると思う。

二、紫の上と源氏の「独り言」の引歌

①紫の上の「独り言」に源氏が反応

（紫）「あはれなりし世のありさまかな」と、独り言のやうにうち嘆きて  
A「思ふどちなびく方にはあらずともわれだけばりにさきだちなまし」  
（源氏）「何とか、心憂や誰により世をうみやまに行きめぐりたえぬ涙  
にうきしむ身ぞ」いかでか見えたてまつらむ。B命こそかなひ難か  
べいものなめれ」（澤標 二二・二八三）

A須磨のあまのしほ焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり

（古今集 恋四 読み人知らず・伊勢物語）

五十日の祝いが源氏から届いたことで、明石の君は慰められた。源氏は  
明石の君の返歌を繰返し見えては「独り言」を言った。それを聞いてい  
た紫の上は「浦よりをちに漕ぐ舟の」と「独り言」を言って、物思いに  
沈んでいた。Aの伊勢の歌の下二句「我をばよそに隔てつるかな」を言  
わんとしたのである。源氏はその「独り言」を聞きつけて、「こはただ  
かばかりのあはれぞや」と抗弁し、私の独り言を敏感に聞きつけて勘ぐ  
るものですと、半ば呆れて明石の君からの手紙の上書きを見せたりし  
た。①と同様、明石の君と源氏の関係に紫の上が嫉妬する場面である。  
①②ともに、相手の声が聞き取れるごく傍にいて、独り言を言ったり、  
ため息をついたりしている。そして、その様子を互いに察知して、返歌  
したり、引歌で反論したりする。「独り言」の引歌といっても、相手の  
耳に入ることを予測、又は計算している要素がきわめて強いと思われる。

③源氏の「独り言」と紫の上の反応

（源氏が）覗ひき寄せたまうて、手習に「A恋ひわたる身はそれなれど  
玉鬘いかなるすぢを尋ね来つらむ／あはれ」とやがて独りごちたまへば  
（紫の上）げに深く思しける人のなごりなめり、と見たまふ。  
（玉鬘三一・二二八）

Aいづくとて尋ね来つらむ玉鬘われは昔のわれならなくに

（後撰集 雑四 源善朝臣）

夕顔の遺児玉鬘に初めて対面した源氏は、そのめやすき喜び紫の上  
にも玉鬘の事を語った。そのあと源氏が手習に書いた歌を独り言のよう  
に呟くの聞いた紫の上は、「あはれとひたぶるにらうたき方」と源氏が  
言っていた夕顔の忘れ形見なのだと実感した。

①②③を通じて言えることは、紫の上と源氏は互いの漏らす独り言にきわめて敏感で、とくにその独り言の中に引歌がある場合は、その歌の内容に思いをめぐらせて、相手の心を探り理解しようとする。源氏のつぶやく引歌のある独り言は、女性関係を紫上にそれとなくほのめかす場合に使われることが多い。一方紫の上も、源氏の二心を直接非難するのではなく、独り言の体裁をとって引歌を用い、自分のやりきれない思いを訴えている感がある。

重要なのは、源氏が興ざめし夫婦の溝が深まった「若紫」の葵の上の「とはぬはつらきものにやあらん」と異なり、紫の上の引歌を使っている独り言は、いつも有効に働き、紫の上と源氏の夫婦仲を確認し、深める働きをすることが多いという点である。

上記の点と対照的なのが次に取り上げる夕霧と雲居雁の場合である。

### 三、雲居雁と夕霧

#### ①雲居雁の独り言を夕霧が聞き、恋情を募らせる

幼き心地にもとかく思しみだるるにや「A雲居雁も我ごとや」と独り言ちたまふけはひ、若うらうたげなり。(夕霧は) いみじう心もとなければ「これ開けさせたまへ。小侍従やさぶらふ」とのたまへど音もせず。

(少女 三―四二)

A霧深き雲居雁もわがごとや晴れせず物の悲しかるらむ(奥人)

雲居雁の呼称の生まれた有名な場面である。父内大臣の意向で夕霧と雲居雁の仲は裂かれそうになる。あきらめきれない夕霧が女君のあたり

や」という心のこもらない陳腐なものであったと物語の語り手は揶揄している。植田恭代氏に「夕霧の巻では落葉の宮との恋物語を主として引歌は機能する」という指摘(注8)があるが、数少ない雲居雁の引歌の場面も、夕霧の誠意や情熱の感じられないものとして描き分けられている。①の「少女」での二人とは大きく違っている。夕霧自身もこのあと落葉の宮が、塗籠に籠もって自分を頑なに拒むので、気が滅入って雲居雁との恋の始めのころの気持を「いにしも何心もなう、あひ思ひかはしたりし世の事」と、貴重なものとして思い返したりしている。

このように夫婦間の独り言の引歌は、源氏と紫の上の間では変わらぬ緊張感を保ち、互いの内心を推し量る重要なヒントであり、その独り言への応じ方で再び夫婦の絆を深めることも多かった。しかし、夕霧と雲居雁の場合は、思春期の幼な恋の時と結婚後子沢山の親になってからのものとは異質のものになっている。夫婦間の独り言の引歌の描写は、緊張感ある夫婦関係が維持できているか否かのバロメーターにもなるのではないかと思われる。

ただし、源氏と紫の上の引歌をふくむ独り言の関係も、第二部に入って女三の宮をめぐる場面では大きく変わってくる。紫の上は明石の君の時のように直接口に出して嫉妬できなくなっている。それは、皮肉にもかつての明石の君の置かれていた立場と似ているのであるが、その点は次稿でとり上げたい。

### II うち誦す

「うち誦す(誦す)」は日本国語大辞典では「声を上げて経などをよあげる。口ずさむ」となっている。源氏物語には三十一例あり、和歌の場

に忍んでいると、可愛らしい独り言が聞こえた。それを耳にした夕霧は女君恋しさをおさえきれなくなってしまう。この場合すぐ後に雲居雁は「独り言を聞いたまひけるも恥づかしうて」とあり、夕霧に聞かれることを全く意識していなかったことがわかる。筒井簡の恋の場面として独り言が効果的に使われている。「花の宴」の臘月夜の独り言の朗詠を源氏が立ち聞きして魅了される場面(こちらは「独り言」でなく「うち誦じて」注7)とともに、青春のみずみずしい恋の場面である。

しかし、夕霧が落葉の宮との中年の恋に感う「夕霧」の巻になると、全く違った雲居雁の独り言と夕霧の反応が描かれる。

#### ②「夕霧」巻の雲居雁と夕霧

(雲居雁)「Aなるる身をうらむるよりは松島のおまの衣にたちやかへまし／なほうつし人にては、え過ぐすまじかりけり」と独り言にのたまふを立ちとまりて(夕霧)「さも心憂き御心かな。松島のおまの濡れぎぬなれぬとてぬぎかへつてふ名をたためやは」うち急ぎていとなほなほしや。(夕霧 四―四六一)

A松島や小島の磯にあさりせしあまの袖こそかくは濡れしか

(後撰集 恋四 源重行)

夕霧と落葉の宮の関係は公然のものとなり、雲居雁は傷つき嫉妬する。その夜も夕霧が落葉の宮の元に行こうとした時、雲居雁は独り言のように引歌を含む歌を口にした。それを聞いた夕霧は立ち止まって返歌するが、心は既に落葉の宮の方にあるためか「うち急ぎて、いとなほなほし

合が十四例、漢詩文が十四例、経が二例、限定できないもの(心ばへある古言などうち誦じたまひて「東屋」)一例である。辞典の説明とは異なり、源氏物語中では経より和歌・漢詩文をよみあげる方が圧倒的に多いことがわかる。本文中に引歌・引詩が明示されているものは以下の二十三例である。経二例(須磨・御法)と残り六例は引歌・引詩を含まないのである。聞き手が断定できず推測の域を越えないものは?を付けた。「ひとりごと」「口ずさむ」と異なり、聞き手の返歌は一例もない。

☆引歌・引詩の明らかな「うち誦す(誦す)」二十三例

主語	回数	聞き手(巻名)と回数
源氏	和歌7	紫の上の女房1(若紫)・末摘花1(末摘花)
		藤壺1(賢木)・宰相の君1(須磨)・供人1(須磨)
		惟光1(濡標)・玉鬘?1(常夏)
	漢詩7	頭中将他1(賢木)・夕霧?1(幻)・供人4(須磨)
		聞き手なし1(胡蝶)
頭中将	和歌1	柏木と夕霧1(藤裏葉)
	漢詩2	大宮1(少女)・供人1(須磨)
薫	和歌2	大君と中の君1(総角)・浮舟女房達1(東屋)
勾宮	和歌1	左近の少将1(東屋)・漢詩1 中の君1(宿木)
臘月夜	和歌1	源氏1(花宴)
頭弁	漢籍1	源氏(賢木)
柏木	和歌1	聞き手なし(若菜下)

次にいくつか例をみていきたい。

①「浮舟」の薫の「うち誦じ」の引歌―「衣かたしき今宵もや」―

「浮舟」の薫の浮舟に対する「うち誦じ」の引歌は、浮舟の耳には入らず勾宮が聞いたことによって、物語中で皮肉で劇的な役割を果たすことになった。

(薫)「A衣かたしき今宵もや」とうち誦じたまへるも、はかなきことを口ずさびにのたまへるもあやしくあはれなる気色そへる人ざまにて、いとも深げなり。言しもこそあれ、宮はねたるやうにて御心騒ぐ。

(浮舟六一―一三八)

Aさむしろに衣片敷きこよひもや我を待つらむ宇治の橋姫

(古今 恋四 読み人しらず)

雪の降る夜、内裏で詩会が行われた後、薫が勾宮の宿直所で朗誦するのを、勾宮が耳にする場面である。薫の胸中にあるのは浮舟に相違ないのだから、実際に聞いているのは勾宮であるという手のこんだ設定となっている。浮舟本人には伝わらぬ引歌であり、勾宮は「おろかには思はぬなめりかし。かたしく袖を我のみ思ひやる心地しつるを、同じ心なるもあはれなり。わびしくもあるかな。かばかりなる本つ人をおきて、わが方にまさる思ひはいかでつくべき」(浮舟六一―一三八)と、ライバル意識をかきたてられ、浮舟を橘の小島に連れ出し、耽溺の二日を過ごすきっかけともなったのである。三角関係を激化させ、浮舟を追い詰める要因のひとつはこの間接的引歌であると考えられる。山口博氏は「源

氏物語作者は、引歌を単なる修辭から構成に関わる技法に昇華せしめたのである」と指摘されたが(注9)、この部分などがその顕著な例ではないかと考える。

なお、この古今集の宇治の橋姫の引歌は、「橋姫」では薫が大君に向かって直接詠んだ歌に引かれ、「総角」では勾宮が中の君に対してこちらでも直接詠んだ歌に引かれている(五一―二七四)。浮舟だけでは直接届かぬ引歌であって、しかも物語の展開には重大なはたらきをする引歌であった点、注目すべきである。

②「澤標」の源氏の「うち誦じ」の引歌

ところで、いくらか内容は異なるが同じ「うち誦じ」の用例でもあり①の「浮舟」の間接的引歌の設定にやや似ている場面が「澤標」にもある。住吉詣でに訪れた源氏が、明石の君も参詣に来ていて、源氏一行に圧倒されて立ち去ったことを惟光に聞かされる場面である。

(源氏)堀江のわたりをこ覧じて「A今はたおなじ難波なる」と、御心にもあらでうち誦じたまへるを、御車のもと近き惟光、承りやしつらむ

(二―二九六)

Aわびぬれば今はた同じ難波なるみをつくしても逢はむと思ふ

(拾遺集 恋三 元良親王)

これも源氏が内心で明石の君を思って無意識に口にした引歌である。しかし、実際に聞いていたのは明石の君でなく惟光であった。そして主人の色恋に関しては、とりわけ勘が良く気の利く彼は筆を差し出した。源氏が明石の君のことを気の毒がり、恋しがついていると察したからであ

III 口ずさむ

口ずさむは日本国語大辞典によれば「詩歌などを思いつくままに吟ずる。また、何となくものをいう」となっている。勉強社『源氏物語総索引』によれば十八例ある。伊井索引に載っている引歌表現を含むものが九例で、そのうち聞き手が明らかに返歌など反応があったもの三例、誰かが聞いていたと推測できるもの六例である(その中でさらに細かくいえば、先に聞いた者が他の誰かに伝える型が三例あると思われる)。

源氏物語において引歌表現を含む「口ずさむ」は「うち誦ず」と同様会話における引歌とは言えないかも知れないが、聞き手がそばにいて返歌をしたり、何らかの影響を受けたりする場合がかなりあるといえるであろう。そして当然、引歌を「口ずさむ」む当人もそのことを意識している場合が多い。以下に引歌を含む「口ずさむ」表現をした主語と回数、聞き手と返歌や返事の有無を示した。

☆引歌・引詩を含む「口ずさむ」九例

主語 聞き手(巻名と内容)

薫3 浮舟女房↓浮舟1(東屋)・弁の尼↓浮舟1(宿木)

源氏2 勾宮1(浮舟「衣かたしき今宵もや」のうち誦ずと重複)

源氏2 紫の上1(薄雲 催馬楽↓女房通して返歌)・紫方女房達↓

夕霧2 紫の上1(若菜上 白詩文集)

紫の上1 一条御息所1(柏木 返歌)・雲居雁1(夕霧)

紫の上1 源氏1(紅葉賀 引歌で返事)

勾宮1 右近1(東屋)

では、いくつか例をあげて考察してみたい。

①「東屋」薫の「口ずさみ」の引歌

「『A狭野のわたりに家もあらなくに』など口ずさびて里びたる實の子の端つ方にゐたまへり」(東屋六八四)

A 苦しくも降りくる雨か三輪の崎狭野の渡りに家もあらなくに

(万葉集 雑歌 長忌寸奥麿呂)

薫が初めて三条の小家に浮舟を訪ねる場面である。「雨や降りくれば、空はいと暗し」という天候でもあり、薫は古歌の一節を口にする。無論、一、二句の「苦しくも降りくる雨か」をいおうとしたのである。

「口ずさびて」を全集は「口ずさんで」、大系は「口吟して」、玉上評釈は「小声で歌って」と解釈している。つまり、女房たちに聞こえることを充分計算に入れてということではないのか。そしてさらに、女房を紹介して浮舟の耳に入ること意識しているのではないかと思う。だとすれば、間接的ではあるが浮舟に向けての引歌表現といえるであろう。やはり薫も浮舟との対面の初めにはかなり気取って、恋愛の効果的小道具として、引歌を用いたといえると思う。しかし、その後すぐ逢瀬をもったことが大君や中の君の場合と異なっている。その点からいえば対し方に差があったといえるであろう。

ただし、「佐野のわたりに」は古今六帖にない万葉集のみの歌なのであまり教養のない浮舟の女房たちが気付いたかという疑問は残る。当時人口に膾炙していた歌であったのかもしれないと玉上評釈はいう。

和泉式部続集三五〇に詞書「和泉と云ふ所へいきたるをとこの許より

Cよりあはせて泣くなる声を糸にしてわがなみだをば玉にぬかなむ

(伊勢集)

柏木の没後夕霧は一条の宮を訪問し、御息所と故人のことを偲びあった。夕霧は退出しようとして庭先の桜が盛りなのを目にして、「代白頭吟」の「年年歳歳花相似 歳歳年年人不同」を底流とする古今集の一節を口ずさんだ。さらにその引歌に連続させて自らも歌を詠んだ。すると御息所は「いととう」すかさず古今集や伊勢集を踏まえた歌を返した。全集注は「いと深きよしにはあらねどめやすきほどの用意なめり」を、「夕霧の独吟に応じた嗜みを評する」と解説している。

この例からわかることは、独吟であっても耳にした聞き手がすばやく反応して、ふさわしい返歌をすることが賞賛されるという点である。この例は「口ずさみ」と接頭語「うち」のついてない「誦じ」の両方が見られるが、①の「東屋」でもこの二つの動詞が同じ場面が使われていた。どちらにでも言い換えるくらいができるほど、内容的には近い語かとも思われる。

③催馬楽「桜人」の「口ずさび」―源氏と紫の上

(源氏が明石姫君に)「A明日帰り来む」と口ずさびて出でたまふに、(紫の上が)渡殿の戸口に待ちかけて、中将の君して聞こえたまへり。

「A舟とむるをちかた人のなくはこそあすかへりこむ夫と待ちみめ」  
「A行いたう馴れて聞こゆれば、いとはひやかにほほ笑みて(源氏)」「A行きてみてあすもさねこむなかなかにをちかた人は心おくとも」

A 桜人、その舟ちぢめ、島つ田を、十町作れる、見て帰り来んや、そよ

(薄雲二四二九)

さのうらといふところなむ、ここにありけりとききたりや、といひたるに」、歌「いつみてかつげずはしらんあづまぢと聞きこそわたれさの舟橋」がある。「佐野のわたりに」ではないが、植田恭代氏の御論の注にあるように「和泉式部のころに『あづまぢのさのふなはし』が浸透していたことを示す一資料にはなる」(注10)であろう。薫が浮舟やその女房たちに理解可能かどうかにはあまり頓着せずに、色好みを気取って万葉集の引歌を「くちずさ」んだと解釈したい。

薫は大君、中の君に対する時と異なり、浮舟に対しては引歌で語りかける回数が極端に少ないという指摘がある(注11)。絵巻で有名なこの部分も、薫の浮舟に対する引歌とは解釈されていないが(同)、微妙なところではないだろうか。

②夕霧の「口ずさび」「誦じなして」に一条御息所返歌する

(夕霧)「Aあひ見むことは」と口ずさびて、(夕霧)「時しあればかはらぬ色にほひけり片枝枯れにし宿の桜も」わざとならず誦じなして立ちたまふに、いととう(御息所)「B Cこの春は柳のめにぞ玉はぬく先散る花のゆくへ知らねば」と聞こえたまふ。いと深きよしにはあらねど、いまめかしうかどありとは言はれたまひし更衣なりけり。げにめやすきほどの用意なめりと見たまふ。(柏木 四一三三)

A 春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり

(古今集 春下 読み人知らず)

B あさみどり糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

(古今集 春上 遍照)

や、あす帰り来ん、そよや(以上夫の詞)。言をこそ、明日ともいはめ、をちかたに、妻さる夫は、明日もさね来じや、そよや、さ、明日もさね来じや、そよや(以上妻の詞)。(催馬楽・桜人)

明石の君の待つ大堰に行こうとする源氏は、指貫の裾にまつわりついて後追いつる明石の姫君に「明日帰り来む」と催馬楽桜人の一句を口ずさんだ。しかし、紫の上は「自分に対する源氏のあてこすり(全集注)」と感じて、女房の中将の君から源氏に、同じ桜人の待つ妻の詞を踏まえた歌を伝えさせた。源氏も紫の上の歌の明石の君を指す「をちかた人」を用いた歌を返して紫の上の機嫌をとる場面である。

直接源氏が聞き手としていたのは、数え年四歳の頑是ない姫君であったのだが、過剰ともいえる反応を示したのは紫の上であった。紫の上は「をちかたに、妻さる夫(妻である夫の約)」という催馬楽の部分効かせて源氏を非難し、明石の君を「をちかた人」と表現した。

源氏の「口ずさび」を聞き逃さず、間髪をいれずに女房の口を通して嫉妬する歌を詠みかけた紫の上の、明石の君に対する優位性が感じられる。源氏の「口ずさび」が和歌でなく催馬楽の一節であった点が、紫の上との引歌のやりとりの中では珍しい。紫の上が自分の歌を女房の口から源氏に伝える場面はここだけなのだが、なれなれしい催馬楽を引歌としているため、自ら口にするのは、ややはしたないという意識が働いたせいであろうか。

―おわりに―

源氏物語中の膨大な引歌のうち、会話文中の引歌に限定して、「独り言の引歌」という観点からささやかな考察を試みた。平成七年から開始

した後藤祥子先生門下で取り組むことにした『源氏物語引歌注釈事典』  
（現在も続行中）の作業を進めて行く中で、引歌というものを初めて真剣に考えるようになった。まず「引歌とはそもそも何なのか」という定義づけと、そのタイプ別分類及び源氏物語にいたる引歌史の研究は、細流抄あたりに遡って先覚の調査の積み重ね（注12）がある。宣長の『源氏物語玉の小櫛』で一度狭まったかにみえた定義が、玉上琢弥氏（注13）らにより再び広義のものとなった。昭和五二年には伊井春樹編の『源氏物語引歌総索引』が刊行されたことにより、源氏釈や奥入以降の古注釈の引歌指摘を一覧することが可能になった。

源氏物語の引歌の研究は、引歌の定義づけと分類、本歌の認定という作業がきわめて複雑であるために、その次の段階の源氏物語における引歌表現の中身の考察を深めることが相当困難である。しかし、昭和五十年代あたりから伊東祐子氏（注1）、伊井春樹氏（注4、注5）、川添房江氏（注14）、小町谷照彦氏（注15）鈴木日出男氏（注16）、清水婦久子氏（注17）、鈴木宏子氏（注18）、後藤祥子氏（注19）、植田恭代氏（注8）などが源氏物語における引歌の働きの特性について物語に則してさまざまな精緻な考察を始められ、大きな成果をあげられている。本稿はそれら先覚の業績に導かれて「独り言の引歌」という、ごく限られたテーマを検討してみたものである。

尚、続編として次号に「効き目があった引歌と無かった引歌」「女一の宮と宮の君、朝顔の斎院における引歌」「手習の引歌」等について書くことを予定している。

（注）

1 伊東祐子「源氏物語の引歌の種々相」『源氏物語の探究第十二

輯』風間書房・昭和六二年

2 山口博「源氏物語の引歌」『源氏物語講座七』有精堂・昭和四六年では「口頭によるすべて」を会話中の引歌と数え二六三例あるとする。しかし、会話中の引歌の掲載されている用例が少ないため、本稿で問題にする部分との比較ができなかった。

3 青柳隆志「源氏物語における朗詠」『日本朗詠史研究編』笠間書院・平成十一年

4 伊井春樹「源氏物語における引歌表現の効用」『源氏物語集成第九巻』平成十二年・風間書房

5 伊井春樹「源氏物語の引歌表現」『源氏物語の探究第五輯』

風間書房・昭和五五年

6 秋山虔・渡辺実（対談）「源氏物語作者の表現意識」『国文学』昭和五七年十月

7 注4と同書で、伊井氏は古歌を「誦す」用例に女性は一人もいないとされたが、唯一「花宴」の臘月夜の例がある。

8 植田恭代「浸透する引歌」『源氏物語』夕霧巻「霧の籬」から」日本女子大学紀要文学部第44号

9 注2と同書。

10 植田恭代「源氏物語における催馬楽引用」東屋の巻の場合」

『中文学第43号』平成元年に、歌ことば「さののわたり」に関する詳しい考察がある。

11 注1と同書。大君に八回、中の君に五回、引歌を使って語りかけているが、浮舟には「あはれわがつまという琴は」という土俗性の強い歌謡を一回口にしているのみと指摘する。

12 鳥野幸次「源氏物語の引歌」『国語と国文学』大正十二年十月

・尾崎知光「源氏物語における引歌表現」『名古屋大学文学部研究論集1』昭和二六年↓「源氏物語私読抄」笠間書院・昭和五

三年

・玉上琢弥「源氏物語の引歌」中央公論社・昭和三十年

・朽尾武「源氏物語の引歌について」『都大論究2号』昭和三七年

・久保田淳「和歌文学と源氏物語の関係」『解釈と鑑賞』昭和四三年五月

・村川和子「引歌の発生、育成期における表現技巧」『国文目白』

昭和四五年

・山口博 注2と同

・藤岡忠美「源氏物語の源泉Ⅱ和歌」『源氏物語講座八』有精堂

昭和四七年

・鈴木日出男「引歌の成立―古今集規範意識から仮名散文へ」

『文学』昭和五十年十二月

・木船重明「源氏物語和歌作詠法」『源氏物語その文芸的形成』

広島平安文学研究会・昭和五三年

・宮崎（伊東）祐子「源氏物語の引歌について」『学習院大学国

語国文学会誌23号』昭和五五年

・高橋亨「源氏物語の内なる文学史」『源氏物語の対位法』東大出版会・昭和五七年

・藤平春男「新古今集と源氏物語―定家の本歌取りと源氏物語の引歌」『源氏物語と歌物語』武蔵野書院・昭和五九年

・今井源衛「源氏物語の引歌・引詩」『完訳日本の古典三』小学館

昭和五九年

・寺本直彦「源氏物語受容史論考 続編」第一部第一章源泉の問題

風間書房・昭和五九年

13 玉上琢弥「源氏物語の引き歌（その一、その二）」『国語国文』

27巻8、9号・昭和三三年↓「源氏物語研究」『源氏物語評釈

別巻一』角川書店昭和四一年

14 河添房江「引歌―源氏物語の位相」『和歌文学の世界10』笠間

書院・昭和六一年

15 小町谷照彦「レトリックとしての歌ことば」『源氏物語の歌こ

とば表現』東京大学出版会・昭和五九年

16 鈴木日出男「完訳日本の古典源氏物語」一〇十の巻末引歌一覧

小学館・昭和五八年↓昭和六三年

17 清水婦久子「源氏物語と和歌―本歌と引歌」『王朝和歌を学ぶ

人のために』世界思想社・平成九年

18 鈴木宏子「柏木の物語と引歌」『国語と国文学』平成四年八月

↓「古今和歌集表現論」笠間書院・平成十二年

19 後藤祥子「引歌問題の諸問題―源氏物語を中心に」『和歌文学

論集3』平成五年